

生涯にわたって学び続け、その「学び」を社会の中で生かす。「学び」から「行動」へ
地域で展開される住民参加の活動や NPO 活動などをとりあげます。

今号の
 視点

耕作放棄地を畑に変え、野菜を育てる「Potato Kids」。目標は、月1回ひらく「子ども食堂」で自分たちが育てた野菜をつかって食事を提供すること。地域の大人が全面的にバックアップする子どもたちの取組を取材しました。



取材場所のヴィンステヒえづで

放課後は、畑に集合！ わたしの居場所はこちらにある

～ Potato Kids (日吉津村) ～

楽しくて学びにつながる事ができたら

令和4年4月にできた Potato Kids。代表の光谷純子^{みつたに}さんが、自身の子どもが小学校4年生のときに立ち上げました。「Potato Kids ができたきっかけは？」と聞くと、「学校にいくのがつらい子がでてきて……。それでも、やっぱり友だちとつながっていたいので」と、静かに話してくれました。「どうしたらいいかなって考えたとき、子どもたちにとって楽しくて学びにつながる事ができたらと思ったのがきっかけです」。イメージは、子どもがつくる子どもの会社。お金もうけのしくみなど、社会に出る前にいろいろなことを体験して、生きる力をつけてほしいと考えました。

会の名前である Potato Kids は、サツマイモを植えて村のふれあいフェスタで売ったことからつけられました。光谷さんをはじめ保護者は、子どもたちがこのフェスタでお客さんと呼び込み、いきいきと働く姿を目にしました。「サツマイモを栽培して売るとい

体験をとおして、自分たちの力でいろいろなことができると子どもたち自身が感じた」と目をほそめます。

畑は子どもたちの居場所

Potato Kids の活動は大きく2つ。一つは畑で野菜をつくること。もう一つは、子ども食堂の運営です。日吉津村では約4万平方メートルの耕作放棄地があり、そのうち4千平方メートルを Potato Kids が借りています。みんなでこの土地の草を刈り、耕作放棄地が畑へと生まれ変わりました。令和6年2月から野菜づくりを開始。農作業は、Potato Kids ができた当初からずっと活動のサポートをする、日吉津村の農業委員でもある三嶋真樹^{みかもまさき}さんが指導します。畑に何を植えるかは子どもたちで考えました。

「畑仕事は大変です」と、中学2年生の瀧井^{たきい}さん。「僕は虫が好き。畑で虫を捕まえるのが楽しい！」と話すのは同じ学年の光谷さん。畑にゲームはもっていかな

いため、子どもたちは畑仕事に専念します。とはいえ、おしゃべりに夢中で、なかなか作業が進まないのも事実のようです。

「もし畑がなかったら、子ども同士で集まることもなく家に一人だけだった」と光谷さん。今は畑があるから、畑に行けば友だちに会える。畑は子どもたちにとって、みんなと会っておしゃべりができる居場所になっています。

みんなで作る「ポテト食堂」

子ども食堂は、月に1回ひらかれ毎回約30名が訪れます。その名もポテト食堂。旬のもの、地元の食材をとり入れた献立を保護者が考え調理します。子どもたちは、配膳や受付を担当。「どの世代の方が来てもOK」と光谷さん。4月のメインはサバの竜田揚げ、

5月はタケノコご飯、6月は鮭のバターご飯でした。

食材はすべて地域の方からの寄付です。野菜は子どもの祖父母、キノコ類は三嶋さん、魚は「とっとり子どもの居場所ネットワーク“えんたく”^{*}からいただきました。また、子どもの祖母に栄養士の方がいて、その方や村内のシェフからアドバイスを受けたことも。ポテト食堂は地域の方に支えられています。

事前に申込をすれば、村民はだれでも食堂を利用することができます。若いお母さんが子どもさんと、近所の方が連れ立って、高齢者がお一人で。いろいろな方が来られます。大人は300円、子どもは無料にしています。無料だと気が引ける方もいて、「ほんの気持ちボックス」を置いてはどうかというアイデアも。「こんなんしたらいいよ。こうしたらどう?」と、みんなで話しあう「みんなで作る食堂」になっています。

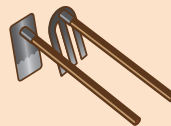
畑ははじまったばかり。これから、いろいろな野菜を育てていきます!

発足当時5年生だった子どもたちは今、中学1年生。学校が終わると自転車で畑に直行! 到着したら、すぐ畑仕事にとりかかります。弟や妹も参加。



保護者が毎朝、水を準備。放課後、子どもたちが水やりをします。

きのこの会社を経営する三嶋さん。三嶋さんのご厚意で使用済みの菌床がすきこまれ、畑の土はふっかふか。



大人は畑で井戸端会議 (左から、^{いしとび}右飛はつみさん、三嶋さん、光谷さん)



Potato Kidsのメンバーには、部活動をしている生徒としていない生徒の両方がいます。今年から地域貢献活動をすれば校内の部活動に所属しなくてもよくなり、Potato Kidsの活動は、学校からも公認されています。部活動をしている生徒は、部活動のない日にPotato Kidsの畑に集まります。

自分たちで育てた野菜をつかいたい

今後の目標は、自分たちで育てた野菜をポテト食堂でつかうこと。「畑が軌道にのれば、いずれは加工品も手がけたい」と意気込みます。「子どもたちが一生懸命つくったトマト・ニンニク・タマネギでケチャップをつくる。しかも無農薬で。なんかうまそうじゃないですか」と三嶋さん。

畑のほかには、ショッピングモール裏の休耕地でヒマワリを育てています。地域の画家の方から、「自分の孫は大きくなり、もう子どもと関わることがない。さみしい。昔は声がかかって小学校に絵を教えに行ったこともある」という話を聞いた石飛^{いしとび}はつみさん。「じゃあ、ぜひ教えてください！」と、講師をお願いして、育てたヒマワリの写生会が実現しました。また、昨年の9月に開かれた日吉津小グラウンドの芝生化10周年イベントには子ども縁日を子どもたちが主体となって企画。盛り上げに一役買いました。



いずれは大人の居場所も

「子どもが大きな声を出すと苦情が来る時代。危ないことはだめだけど、楽しくて大きな声を出したり、走り回ったりできる屋内の拠点をつくりたい」。さらには、「いずれは大人の居場所も。老後の居場所を妄想中」と光谷さんは笑顔で話します。「みんなが楽しくいられて、困ったことがあれば話を聞いてもらえる。そんな拠点ををつくりたい」と夢は広がります。

「本当によかったと思うのは、子どもたちが自分たちで考えてやりたいことを言ってくれるようになったこと」。「大人になると働かないと生きていけない。だから、この活動をとおして子どもたちに生きる力をつけてほしい」と続けます。

「みんなで協力すると、仲間の力を感じることがができる。Potato Kidsに入ってよかった」と中学2年生の瀧井さん。「前を向いてがんばっていたら何かできる。それを助けてくださるのが三嶋さんをはじめ地域のみなさん」と光谷さんと石飛さんもうなずきます。地域の方に支えられながら、家庭や学校だけでなく社会の中で子どもたちは育っています。



「ポテト食堂」のようす



おいしくて栄養バランスのよい料理がならびます。



子ども縁日のようす。子どもたちが自分たちで企画したスーパーボールすくいとヨーヨーつり

県内にはたくさんの子ども食堂があります。



※とっとり子どもの居場所ネットワーク“えんたく”

子ども食堂の開設、運営の困りごと等を相談できます。
労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団
さんいんみらい事業所鳥取事務所
0857-30-5311



Potato Kids への問い合わせは

日吉津村役場 総合政策課
〒689-3553 西伯郡日吉津村大字日吉津 872-15
TEL 0859-27-5954 **FAX** 0859-27-0903



Potato Kids
インスタ

